

祐介の目

No.120



大田祐介 (福山市議会議員)

電源開発の藤井崇治

福山市最北端の山野町矢川はコンニャク栽培が盛んな地区であったが、過疎化により住民はゼロとなった。その矢川には昭和29年に電源開発副総裁、昭和33年同社総裁に就任し、前後8年間にわたり同社の事業発展に心血を注いだ藤井崇治の生家がある。藤井は旧制誠之館中学を卒業して3年間南小学校の教員を務めた後に京大法字部に進学。卒業後は逓信省に入省し、昭和13年逓信省郵務局長に就任した。そこで郵便配達方法の改善に着目し、郵便戸番制の採用など独創的な方策を樹立したが、これらが後に新住居制度や郵便番号制度の普及に役立った。

さて、電源開発は戦後復興の電力需要の増加に対応して制定された電源開発促進法により、昭和27年に国の特殊会社として設立された。電源開発の最初の大事業は天竜川の佐久間ダムであったが、藤井

航し、藤井は「幸福の覚書」を住民に提示して交渉をまとめた。その内容は『御母衣ダム建設によって立退きの余儀ない状況に相成ったときは、貴殿方が現在以上に幸福と考えられる方策を、我社は責任を以って樹立し、之を実行するものであることを約束する。』とあった。その象徴が水没地域から移植された2本の巨大な桜であり、後に天然記念物に指定され、今でも桜の保守管理は一貫して電源開発が行っている。

このように我が国の郵便事業及び電気事業の歴史に、数々の輝かしい業績をあげた藤井崇治の名前をどれだけの福山市民が知っているのだろうか。生家には藤井が電源開発総裁になる前に詠んだ歌碑が残されているが、イノシシに倒され無残な姿になっていた。これまで紹介してきた藤井与一衛門、磯栄吉、樋口季一郎ら明治20年前後に生まれた福山ゆかりの偉人の顕彰に取り組みむ必要があると感じている。